

## NPO 法人市民福祉団体全国協議会 FAX 通信 2009 年 10 月 25 日

〒105-0011 東京都港区芝公園 2-6-8 日本女子会館 1F

電話:03-6809-1091・FAX03-6809-1093・メールアドレス:[info@senioenet.ne.jp](mailto:info@senioenet.ne.jp)

民主党政権に介護報酬・制度で何を望むか意見募集！！

台風 18 号被災支援金ありがとうございます。

市民協・オーストラリア視察研修報告

小説「こうれいしゃ 死から生へ」 介護保険共同推進機構顧問弁護士 村田 光男

## 民主党政権に介護報酬・制度 で何を望むか意見募集！！

### 処遇改善交付金申請は低調: 8 ~ 1 割未満まで 自治体間で格差大きく

介護ヘルパーへ月額 1 万 5 千円の報酬アップについては、ヘルパーだけであること、申請書類が面倒だなどの理由によって、申請事業所は多い県で 8 割、低いところでは 1 割未満になっています(「シルバー新報」調査)。これでは折角の制度を作っても意味がありません。

さて、民主党政権になりました。市民協では 3 つのルートでロビー活動を行います。市民協直接ルート、介護保険を持続・発展させる 1000 万人の輪、NPO が連携した政策提案・交渉機関(目下、構築中)。介護保険を使いやすい制度にするために、市民協会員の皆様のご意見を募集します。

内容は、介護報酬について、介護保険制度についてです。政権との距離が近くなっています。どうぞ、ご意見をください。市民協では皆さんの意見をまとめて、実現するようにしていきます。

## 台風 18 号被災支援金ありがとうございます！

NPO 法人グループホームのぞみ・太田節美氏(三重県)・  
NPO 法人さわやかたすけあい草加・NPO 法人在宅福祉サービス さわやかさかい

上記の団体、個人のかたからご寄付いただきました。ありがとうございます。

支援金振込先 (郵便振替口座) 00160-6-129935

(口座名) 市民福祉団体全国協議会

お願い: 通信欄に支援金(台風 18 号)とお書き込みください。

## 市民協・オーストラリア視察研修報告

10月18日から25日までのオーストラリア視察研修が終了しました。簡単な報告をしておきます。

### 【シドニー】

#### ・ニューサウスウェールズ大学にてオーストラリアにおける福祉全般の講義

高齢者がどのような状況であるかを調査し、改善方向をアセスメントする（ACAT）、オーストラリアでの在宅ケア（HACCという制度が中心。予算は連邦政府より60%州政府より40%補助）についての説明を受ける。また大学で行われている、福祉のための高齢者住宅についてのデザイン環境設計について検証したデータをもとに企業などに働きかける取り組みについてレクチャーをうける。

#### ・ニューサウスウェールズ州社会サービス（NCSS）協議会

ニューサウスウェールズ州における地域福祉サービスについてのNPOの中間支援団体、行政への提言を取りまとめ報告したり、ロビー活動を中心として活動している。この団体の運営費用の70パーセント（約1億円）は連邦政府からの交付金、30パーセントが会員メンバーからの会費、出版物等によって成り立っている。

#### ・NSW州ミールズ・オンホイールズ協会視察（M.O.W）

HACCが提供する在宅ケアの重要なサービスのひとつである食事サービスを手がけている。全国的には5万人の高齢者・障害者へ8万人のボランティアによって支えられている一食あたりの本人負担の単価は6ドル～8ドル。団体を維持するための管理費（事務初代、人件費、ボランティアの自動車のガソリン代など）は政府や自治体がM.O.Wを支援する。

ボランティアの高齢化が深刻化しており、MOW自体に参加することがステイタスとなるような、取り組みにより、若者のボランティア参加に力を注いでいる。国や州からは独立したサービス体系を確立している。

#### ・高齢者コミュニティサービス協会：Aged & Community Services Association (ACSA)

NPO法人や、チャリティの経営者団体。会員組織からの意見を取りまとめ、政府や州に直接提言する代表者の役割を担っている。（会員数は281（内訳ナーシングホームが217、467のホステル、414のリタイアメントビレッジ、675のコミュニティケアサービス）国からの補助はもらわず、会員団体の問題点などの相談にのるコンサルタント料、福祉教育の受講料などで予算3億円を維持している。

### 【ブリスベン】高齢者福祉サザンクロスケア・クイーンズランド

ケアつき高齢者集合住宅と高齢者が退職後にすこしやすい環境整備を目指すリタイアメントヴィレッジを見学。リタイアメントビレッジでは55歳からの入居が可能となっているが、実際には75歳以上のかたの入居が多い。入居金は40万ドル～、ミドルクラスの生活者がターゲット。

研修についての報告については参加者の方々よりレポートがいただけることになっています。随時HP等に掲載していく予定です。詳細は次号以降に掲載いたします。

## 小説 「こうれいしゃ 死から生へ」

介護保険共同推進機構顧問弁護士 村田 光男

7 老人ホームという職場

「A子さん、おはようございます」職員 e が声をかける。

「おはよう・・・」

「おかわりありませんか」

「はい・・・」

「aさんは・・・」とまどろむA子は尋ねた。

「お辞めになりました」と職員 e。

入居者に挨拶もなかった。

A子には、職員 a がどういう経歴の人か知らされていなかった。職員 a に尋ねることもしなかった。相手のことも聞かずに、自分の話を聞いてほしいと願っているA子。そのことにA子は気づいていなかった。ひたすら自分のことを理解して欲しかった。

「(私に挨拶もなく辞めてしまうなんて)」A子は腹立たしくさえ思った。無視されたようにも思った。

「おはようございます」

「おかわりありませんか」

職員 a の声掛けが思い起こされた。

あの職員 a にとって、私は何だったのか。

80年生きてきた。夫は15年前に亡くなった。子どもはいない。子どもがいなくても、預金があった。2人で旅行をした。2人でゴルフもした。それはそれで楽しかった。だが、一足先に逝ってしまった。早く死なれてはととても困る。ひとりぼっちになった。夫と仲がよかった分だけ、友達が限られてしまっていた。マイホームも建てたが、ひとりでは広すぎる。数少ない友達がたまに来てくれても、夫と過ごしたほどには充実感が持てなかった。充実感を求めて、A子はデパートを歩きまわった。もちろん貯まったお金をふんだんに使った。そのデパートの店員でA子を知らない者はいない、というほどまで、A子は衝動買いをした。

やがてA子は、その浪費癖を心配した友人らの計らいで、今の施設に入所した。半年を過ぎると、友人らは訪ねて来なくなった。心配してくれたことはありがたいと、A子は素直に思ったが、友人らが訪ねて来なくなるとは思わなかった。

「(私はあの方たちにとって、なくてはならない人ではなかったんだわ。)」A子は気がついた。ベッドの中で、職員 e の声が遠くに消えていく・・・。A子は再び眠った。

「はるちゃんっ・・・もっとはよう登ってこいよ」

「いさむははやすぎる・・・」

「弱虫だな、はるちゃんは・・・」

「弱虫じゃない。今、行くって・・・」

・・・

「きれいだなあ」

「何が」

「岩手山だ」

「なんだあ。岩手山か・・・」

「あたりめーだ。岩手山だ・・・」

「わたし、岩手山よりいさむが好きだ・・・」

「・・・俺は岩手山と同じくれえだ・・・はるちゃんが好きだ・・・」

野山を駆け巡り、桜の木に登った 7 歳の日々が脳裏をかすめていた。初恋だと思った。

「A 子さん、おはようございます」遠くの方からまた職員 e の声が聞こえた。

いさむの姿が、突然消えた。

「夢?・・・」A 子がつぶやいた。

いさむを見たのは 55 年ぶりだった。結婚して、それから私はいさむを忘れていた。いろんな私がいる。夫も、いさむも、私をわかってくれる人だった。夫には悪いが、結婚する前の、子どもの頃の話だ。いさむの夢は、夫の夢を見た後に見た夢だ。

「はるちゃん、手をつなぎましょう」男先生が言った。

「はーい」はるちゃんが答えた。

5 歳のはるちゃんは、今でいう保育園の男先生と手をつないだ。戦後まもなくの頃の話だ。農家の生まれのはるちゃんは、農繁期になると、近隣の子どもたちを集め世話をしてくれる小さな施設に昼間だけ預けられた。その日は、この地区の裏山に皆で出かけた。大人は、男先生を女先生の 2 人だけ。2 人とも若い先生だった。子どもは 15 人ほどいた。はるちゃんは男先生が大好きだった。男先生の大きな手の中にはるちゃんの手が隠れていた。

「ごはんの用意ができています」と、また職員 e が言った。優しい声だったが、A 子とは違う世界で生きてきた人の声だった。A 子は、職員 e の歴史を何一つ知らない。

自分のことを話そうと思っていたのに。職員 a が挨拶もなく辞めたことで、その存在は、A の記憶から消えた。記憶が消えただけではなく、この施設に対する不信感に火がともった。

「C 子さん。そこは B 男さんの席ですから、こちらへどうぞ」職員 b が C に話しかけている。

「B 男さんがおいでになる前に移動しましょう」

C 子は動かない。職員 c は、配膳するわけにもいかず、当惑ぎみだ。

職員 d が歩み寄った。

「C 子さん。川の見える向こうの席に移りましょう。」と職員 d。

C 子は、B 男のテーブルとは別の川側のテーブルに移動した。この日から、C 子は A 子のテーブルを離れた。

支援センターくまの グリーンコープ たすけあい佐賀 全労済  
宅老所を全国に広める会